

# ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日創刊  
明治三十二年三月二十八日創刊  
昭和十八年八月一日発行  
昭和十九年八月一日発行  
昭和二十年八月一日発行  
昭和二十一年八月一日発行  
昭和二十二年八月一日発行  
昭和二十三年八月一日発行  
昭和二十四年八月一日発行



## 俳句随想 〔二百九十〕

汀子

季題は俳句の根本要素である。従つて季題を集めた歳時記は俳人にとつても、結社にとつても生命線であり、侵すべからざる聖典でなければならぬ。但しこれはその歳時記が結社の精神、主張や方針を体現して編まれたものに限つての話である。

ホトトギスは現在『虚子編・新歳時記』と『汀子編・ホトトギス新歳時記』を併用しているが、その編集方針は一言にして言えば「文学的な作句本位の歳時記」ということである。具体的には季題として詩あるものは採り、然らざるものは捨てる。現在行われていないにもかかわらず、詩として詠するに足る季題は入れる。世間では重きをなさぬ行事の題でも詩趣あるものは採る、ということである。しかし時代の変化もあつて、削るべき季題や新題の採用についても意を用いなければならぬのは当然である。しかしそれはあくまでも主宰の専権事項である。私の場合は歳時記改変の必要を感じた時に歳時記委員会を組織し、その検討結果を踏まえて主宰である私が決断しようと思つている。ホトトギスで勉強する人に限つて言えば何人にもホトトギスの歳時記をもてあそぶことは許されないのである。

句日記 汀子

平成十七年八月一日 ロイヤル俳壇

過ぎゆきし昨日は遠し日日草  
しのび寄る秋を旅路に拾ひけり  
仕残せしこと数多持ち越せる秋  
昨日去り今日がはじまる日日草  
八月七日 下萌句会

病葉の吹き寄せらるるひととこ  
朝の間の風立秋を告げてをり  
星月夜よりの帰還に祈りあり  
降り足らぬ雨をなげきて秋に入る  
八月七日 高砂正巳氏 句集序句  
立秋や 第二句集の序句乞はれ

八月九日 大阪倶楽部

淀川の花火と気づくまでのこと  
揚 花 火 戦 後 六 十 年 と なる  
新涼といふは朝の間なりしこと  
旅先の花 火 家 居 の 花 火 かな  
あなどりてをりし残暑につかまりぬ  
爛に家路せかされをりにけり  
八月九日 綿業倶楽部  
流星や仰ぐてふことくり返す  
むくげ咲き夕べ終へたる命かな

夜空には置くてふ心流れ星  
花木槿より庭に出て一と巡り  
流れ星いま見しやうな見ぬやうな  
八月十一日 清交社

文月や書かねばならぬ返信も  
白粉の花の匂ひと気づくまで  
大方は大地に戻り秋の蟬  
文月の一と息ついてしまひけり  
滞在の短き 帰 国 秋 の 蟬  
展示替する文月となりにけり  
八月十四日 野分会夏行阿波踊

踊下駄脱ぎて自分に戻りけり  
八月十五日 野分会夏行阿波踊  
旅の荷をまとめて別に踊笠  
空白の月日消えたる阿波踊

阿波踊 偲ぶ 故人の 誰々ぞ  
踊り抜く 棧敷の 視線浴びながら  
踊り込む 棧敷の 果の見えぬまま  
八月十六日 有恒倶楽部  
見えてくる心の起伏 桐一葉  
虫の音のここに届きぬ 談話室  
邂逅の出逢ひ 爽やかなりしこと  
桐一葉 静寂破りて又一葉  
虚子記念 文学館の秋の蟬

少し秋らしき朝風ある目覚め  
八月十六日 無名会

めはじきの遊び心をひそませて  
阿波踊よりの家路と誰彼に  
心もち秋めく朝であることを  
残暑にも忙しさにも負けずをり  
次々と仕事増えゆく残暑かな  
今日よりは残暑やりくりして家居  
八月十七日 夏潮句会

洗ひたる硯に今日のととのへり  
画仙紙も揃へ硯も洗ひけり  
上達も期して筆硯洗ひけり  
ねむの花さそはれ出でし初嵐  
あらかじめ西瓜の置いてある席に  
八月二十六日 時雨会

草雲雀まぎれし声のひとつとこ  
南瓜煮て家居の一人楽しめり  
手花火の輪を囲む輪のありにけり  
手花火の空まだ暮れぬまだ暮れぬ  
手花火の火玉すとんと落ちにけり  
八月二十七日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

山国の新涼とこそ降り立ちぬ  
今宵星 仰ぎ 語らん 露の秋  
秋風や遅遁句碑に人々に  
秋風や句碑の春秋偲びつつ  
八月二十八日 北信越ホトギス俳句大会  
一面の露一本の草の露  
高原の秋 足早に足早に

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年八月一日 はせを句会

咲ききれば月下美人は忘れられ  
牛冷すこれも都心といふはづれ  
夜の秋篝火爆ぜてシテ出づる

八月三日 一水会

凌宵花虚空を掴み落ちにけり

八月四日 蕉心会

晩夏てふ天帝の悪足搔きかな  
蕉像の片陰といふ丸さかな  
暑さとは蕉心会の活気にも  
夏瘦の話しないので私には  
ヒコ様と判りし距離のパナマ帽  
炎天に水ぶつかけてやるかしら

八月八日 朝日カルチャー若草句会

副都心てふ立秋は高きより  
夜這星今宵はどの国を狙ふ  
今日の秋とは風に聞くことばかり  
流星を眼下に山の暮れゆける

八月十一日 土筆会

秋蟬に鳴き包まれてゐる都心  
東京 駅丸の内 口 秋の蟬

秋の蟬皇居震はせをりにけり  
つまべにをつけて八方美人かな  
八月十四、十五日 野分会阿波踊夏行

阿波といふ天地踊つてをりにけり  
踊笠傾ぎて君と判るまで  
踊場といふ一枚の熱気かな  
阿波踊町揺れてゐるゆれてゐる  
阿波の夜動かしてゐる残暑かな

八月十六日 草木瓜会

君も僕も皆阿波人となり踊る  
阿波の夜とは踊る為騒ぐため  
指先に熱気放ちて阿波踊  
ビル風の向き変りたる晩夏かな  
阿波の夜を闊歩してゐる踊笠  
アスファルト濡れて落着く街晩夏

八月十八日 登高会

西瓜食む子は未来へと種飛ばし  
宅配といふ中元の右往左往  
芭蕉葉に來て三十度曲る風  
生物といふ中元に戦けり  
中元にデパート揺れてをりにけり

八月二十三日 若水会

星飛ぶや天動説をちらつかせ  
この一句硯洗ひてよりのこと  
夜這星銀座の夜の更けにけり  
流星に君との過去を流しけり  
草相撲そこそばさんといてんか

草相撲 四十八手を知る 漢  
八月二十四日 目黒学園句会

丸ビルの玻璃を突き抜け秋の蟬  
新涼にビル膨らんでゐる都心  
新涼に流れを変へし目黒川  
秋の蟬てふテナリからバリトンに  
秋蟬の寄辺となりし大樹かな

八月二十七、二十八日 北信越ホトギス俳句大会

句碑といふ露けき時を刻むもの  
爽やかに艶やかに句碑馴染みたる  
大都会抜け来て秋の空となる  
湿原に妖しさ秘めて鳥頭

八月二十九日 「俳句α」吟行

街路樹を玻璃に映して秋涼し  
ビルにビル重ねて残暑纏ふ街  
爽やかに丸の内より皇居抜け  
あきつ寄せ皇居の松の威厳かな  
影といふ新涼降らす松であり  
二重橋水澄む濠に膨らみ  
丸ビルの高さに秋の雲を置き  
秋めいて将門塚の静寂かな  
将門の魂を鎮めて秋の風  
金風にシヨーウインドー輝けり

八月三十一日 夢二忌前日句会

萩の戸を開けギヤマンの輝きに  
ギヤマンの赤より青へ灯火親し  
嵐なき二百十日の忌日かな  
ギヤマンといふ時空超え秋灯下

# 雑詠

## 廣太郎 選

一分二十三滴 輪血寒 昂 小樽 後藤一秋  
 我魂や大寒の空たもとほる 同  
 三寒を畏れ四温を人禱り 同  
 長浜の町のいぶせき氷柱かな 姫路 桑田青虎  
 波荒き瀬鳴りに雛のさらはるる 同  
 娘の家に遊びて一と日うららかに 同  
 一年の逢瀬を散らで待ちし花に 榎原 稲岡 長  
 吉野駅花に溺れてゐたりけり 同  
 駅舎出し人みな仰ぐ花の雲 同  
 大掃除こんな答案見てをらぬ 神戸 山田弘子  
 ひと区切てふは春めく机辺かな 同  
 桜咲き人のところはゆらゆらと 同  
 み吉野の雨の閑かを散る桜 同  
 千本の桜に千の雨の彩 同  
 夕空をついと離るる落花かな 同  
 みよし野の闇に攫はれゆきし花 芦屋 黒川悦子  
 花仰ぎ星を仰ぎて部屋に入る 同  
 風吹かば落花渦巻くはずの谿 同

城址なる梅の見頃と聞かされて 福岡 松尾緑富  
 観梅の人の流れの静かさに 同  
 吾も人も梅が香に酔ひ痴れるかに 同  
 梅園を披くころの弾み来し たつの 浅井青陽子  
 つゝがなく生きて梅園披く幸 同  
 春寒のきびしさ言ひて別れけり 同  
 暖かやすぐ失くなりし午前中 東京 柴原保佳  
 あつといふ間の一年ぞ花吉野 同  
 街ざくら濠ざくら城ざくらかな 同  
 鮫鯨の七つ道具を見せて切る 同  
 鮫鯨の心臓小さく肝太く 同  
 省略を尽くし鮫鯨なほ吊す 同  
 箱根より熱海に落ちて芹の水 熱海 嶋田一步  
 見つけたることにはじまり芹を摘む 同  
 三人の一人が見つけ芹を摘む 同  
 花冷や少々重き旅靴 同  
 菜の花の車窓が黒にトンネルに 同  
 此処にまた公園あればチューリップ 同  
 涅槃図の向うに來世ありにけり 同  
 たんぼぼに青空降りるだけ降りぬ 大阪 塙 告冬  
 掌に馬酔木の花の音ありぬ 同  
 エープリルフル逃してしまひけり 同  
 鞦韆に乗りて少女は風となる 神戸 藤井啓子  
 鞦韆の子は青空の高さまで 同

## 雑詠句評（七月号より）

むつみ・千鶴子・葉

中正・美奇・保佳

憲明・明倫・静龍

芳子・廣太郎

### 欠伸してなほかまくらの主の子 秋田 浅利恵子

秋田在住の作者にとつても「かまくら」は幼い頃の楽しい思い出の一駒であろう。二メートル四方の雪洞の中に水神を祀り、灯明をともし、供物をする。子供たちがその中で甘酒を温め、餅を焼き、通る人にも振舞い、あくまでかまくらの「主」は子供なのである。一昨年はじめて出かけた横手の「かまくら」で「あがつてたんせ」の子供の可愛らしい呼び声に誘われて、ご馳走になった甘酒とちよつとこげた餅が懐かしい。「かまくら」にありても母の膝が好き」父青虎の句をふと思ひ出す。母の膝で眠る子も「欠伸して」今にも寝入りそうな子供も、かまくらの「主」なのである。子供の祭り事である「かまくら」の本質が楽しく描写されている。（むつみ）

秋田県横手市が有名だと思うが、筆者も一度だけそこで「かまくら」を見た、というより体験した。何といつても子供が主役であり、つい大人も頬を緩めてしまうものである。それでも夜にな

るとやはり子供は眠くなるのは当然で、あどけない子供の表情から季節が明るく表現されている。（廣太郎）

### 金婚よ七五三よと写真館 福知山大槻右城

我が家の近くに写真館があった。昔は写真館は多くて、たしか小沢昭一氏も写真館のご子息ではなかったか。私は小学校の頃、学校の帰り道、写真館のウインドの前に立って、セピア色の写真に見入っていた記憶がある。しかし今はほとんど街の写真館はなくなつてしまつた。我が街の写真館もこの間通りかかったら閉まつていた。子供のお宮参りの時の写真を写してもらつたのは、つい昨日のように思われるのに……。カメラの普及と素人の技術の進歩、機器の進歩、ことにデジカメとポラロイドカメラの出現によつて、必要がなくなつてしまつたのだ。しかしイザという時の台紙のついた写真には、やはり写真館は必要なのである。お見合写真、一家の記念写真、ちよつと修正してほしい時などは尚更。だから今でも都会のデパートには写真室がある。金婚式、七五三、その他、繁盛している。作者の住んでおられる街にもそんな写真館が残っているのだろう。（千鶴子）

最近ではデジカメなど写真機が発達して、素人でも綺麗な写真が撮れるようになったが、やはり記念日などには「写真館」で家族写真を撮る家庭が多いのではないだろうか。「七五三」の時期は結構写真館も混むのだろうが、金婚式を迎える夫婦も来ている。さり気なく季節が使われているところが巧みである。（廣太郎）

天地有情

子選

ものけの遊ぶ吉野の春の月 八尾 岩垣子鹿  
 雨音の他は聞えず 白椿 同  
 杉に見え花に消えたる雨の糸 樞原 稲岡 長  
 黙といふ花の言葉聞いてをり 同  
 蟄居する人あるに蛇穴を出づ 東大阪 東野太美子  
 春めきしひかりに添はぬ心とは 同  
 新涼や 命運とき に 潔き 小樽 後藤 一秋  
 野ざらしの今日在る命爽やかに 同  
 まだほのと野火の匂へる句帖かな 熊本 岩岡中正  
 餡パンが出てあたたかな句会かな 同  
 吾が句集幾度も読む日永かな 豊中 瀧 青佳  
 自由人たらん卒寿の春とこそ 同  
 春光の溢るる青佳句集かな 吹田 宮崎 正  
 雪柳風の姿を見せてをり 同  
 ひれ酒を誰も飲めとは言うてくれず 神戸 後藤比奈夫  
 子規さんと手軽に呼んである歌留多 同  
 嫁の家にありてくつろぐ春の昼 姫路 桑田青虎  
 折柄の句座にうぐひす啼き渡る 同

熱海峠箱根峠の春の月 熱海 嶋田 一步  
 海ばかり見ての生活に春の月 同  
 毎年の虚子忌に老いてゆく身かな 東京 今井千鶴子  
 ほつほと語る春塵拭きながら 同  
 それぞれに藁ぼつち着け寒牡丹 福岡 松尾緑富  
 寒牡丹 白潔き色と見し 同  
 一片を点じそめたる初桜 長岡 安原 葉  
 初花を匂はせてゐる月と星 同  
 夕空は水のごとくに初桜 神戸 山田弘子  
 初桜刻々夕日刻々と 同  
 虚子百句春の光へ放たれし 同  
 摘草もみちくさも俳句のころ 同  
 残雪を越え残雪を越え通夜へ 東京 稲畑廣太郎  
 都鳥風になりゆく白さかな 同  
 空ばかり見てゐる虚子の忌なりけり 同  
 一本の棒のやうなる虚子忌かな 同  
 目もとまで日ざし覚えて日脚伸ぶ たつの 浅井青陽子  
 童謡の丘にも登り春惜む 同

# 天地有情句評

汀子

野ざらしの今日在る命爽やかに 小樽 後藤 一秋

闘病の今日ある命を爽やかとする作者を心より悼みて。

まだほのと野火の匂へる句帖かな 熊本 岩岡 中正

野焼きを身近に見届けた作者の身辺。

自由人たらん卒寿の春とこそ 豊中 瀧 青佳

何物にもとらわれないことを。

春光の溢るる青佳句集かな 吹田 宮崎 正

青佳句集に春光を感じ読み進むにつれて充実感を覚えた作者。

ひれ酒を誰も飲めとは言ってくれず 神戸 後藤 比奈夫

ふとこまつて欲しいと感じた作者の孤独。

もののけの遊ぶ吉野の春の月 八尾 岩垣子鹿

吉野山にはさまざまな歴史が残っている。南朝の悲話など……。

黙といふ花の言葉を聞いてをり 樺原 稲岡 長

花の沈黙の中に花の言葉を聞いている作者。

蟄居する人あるに蛇穴を出づ 東大阪 東野 太美子

人間世界に出て来る蛇に対しての存問の句。